

中野キャンパス

看護学研究科

看護学専攻 (修士課程)

Graduate School of Nursing Science | Master's Program in Nursing Science



少子化社会の看護支援について広く学び、究め、実践できる看護職を養成します

高齢化社会の進展とともに、少子化も並行して進行し、人口構成から見たわが国の将来は、極めて問題の多いものとなっています。政府は少子化社会対策基本法の制定をはじめ、少子化社会対策のための閣議決定を3回も行い、結婚や妊娠、子供・子育てに温かい社会の実現を目指していますが、合計特殊出生率の十分な上昇は認められず、ことに首都圏では統計上からも少子化対策の重要性・緊急性がまったなしの状況となっています。

本研究科では、その少子化社会対策のための看護学的な側面からの支援として、『母性や小児期・学童期に至る看護・保健領域について、少子化社会の課題を広く理解し、その研究課題を検討するとともに、研究結果を自らの現場で実践できる看護人材』の養成を目指しています。ひとつの看護領域にこだわらず、妊娠・出産から子育てや学童としての課題まで、より広い視野に立って、また領域をまたがって研究し、実践する看護職のための学究の場としてほしいと考えています。

国が母子の健康水準向上のための国民運動計画として推進する「健やか親子21」(第2次計画)においても、3つの基盤課題は、「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」、「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」、「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」であり、まさにこれらの基盤課題のための研究の場としていただきたいと思います。

Message

少子化社会における要請に呼応した看護学研究と人材養成

本学の看護学研究科は、少子化社会における看護支援について、関連する複数の看護領域をまたいだ視点に立って研究することを目的とする、大学院修士課程です。母性・小児看護学や学校保健学、これらを支える基盤となる地域看護学や地域政策など、妊娠から子育て過程にわたる看護支援について幅広く学び、ひとつの領域に限定されない研究上の視点を養う研究を通じて看護の実践的人材を養成します。

母子看護とその地域支援に特に関心のある方、あるいは「少子化社会対策大綱」(2015年3月20日閣議決定)に基づき、厚生労働省が全国展開する妊娠期から子育て期にわたる様々なニーズに対するワンストップ拠点「子育て世代包括支援センター」にお勤めされる看護職の方々には、特にオススメの研鑽の場であると考えます。



看護学研究科長
松木 悠紀雄 Matsuki Yukio

特色

複数の領域をまたいだ看護学的視点に立って、看護課題を分析・研究できる人材を養成します

母性期から小児期・学童期へと繋がる、連続した子育て期間を支えるための看護・保健課題を幅広く捉え、これを社会の中で支援するための地域看護による視点も加えて、少子化社会といわれる現代において関心のある看護課題を、複合する関係領域の中で広く理解し、分析し、構造化し、成果として複数領域をまたいだ研究課題として検討・研究できる看護人材を養成します。

看護支援に関する自らの研究成果を現場で実践できる看護人材を養成します

少子化社会の看護支援に関して、看護領域をまたいだ自らの独創的な研究成果をもとに、他の専門職との協働の中で、本学における建学の精神に則り、自らの看護現場で実学として具体化し、提言し、実践できる看護人材を養成します。従って、これまでの実践の場で遭遇した看護課題を胸に秘め、研究の必要性を認めて本学の門を叩いてくださる看護職の方々を心より歓迎します。

入学者受入れの方針 (アドミッションポリシー)

看護学研究科 看護学専攻 (修士課程)

看護学研究科 看護学専攻 (修士課程) は、その教育・研究目的を達成するために、建学の精神に則り、以下の入学者を求めます。

- 1 少子化社会の看護課題について具体的な問題意識をもてるよう看護職としての実務経験を有し、今後のこれらの分野における看護実践に関して熱意をもっている。
- 2 生命倫理・医療の倫理を尊重しながら看護研究とその実践に取り組む積極性と行動力を備えている。

研究科	専攻	在学期間	修得単位及び条件	学位
看護学研究科	看護学専攻	2年以上4年以下	●30単位以上 ●学位論文の審査及び試験に合格した者	修士 (看護学)

■ 研究指導内容／修士課程 ※研究指導内容／修士課程等は変更になる場合があります。

研究指導分野	研究指導内容
母子保健医療の統計分析・評価、母子保健福祉のテーマ別調査研究	以下の研究テーマについて研究指導を行います。 ・母子保健医療統計からみた母子保健福祉システム構築・医療政策の評価・提言 ・子育ての世代間支援、児童虐待、妊産婦の育児不安などのテーマに応じた調査研究
小児慢性疾患患者における成人移行期支援(トランジション)研究	小児科領域において現在最大の課題は、成人期に達した患者の内科へのトランジションです。トランジションは患者の持つ疾患によりその方法が大きく異なることが予測されます。さらに同じ疾患であっても患者個人により十分な配慮が必要となります。このトランジションを患者家族にとって有益なものになるためには、十分な調整力を持った看護師の養成が急務です。どのような要件を整備すれば円滑にトランジションが行えるかどうかを、エビデンスを収集しながら研究指導を行います。
妊婦指導に関する評価・分析	妊婦指導の内容について取り上げ、各種疾病の早期診断に結び付けるようなセルフケアの支援に関する研究指導を行います。また、胎動自覚などを用いた胎児管理のセルフケアの支援に関する研究指導を行います。
地域看護、地域ケアシステム	地域で生活する子どもとその家族への支援、支援を行うための多職種によるネットワークの構築方法について検証します。具体的なテーマとして、「児童虐待予防」「重度の障がいを持つ子どもの在宅療養支援」「発達障害、精神障害への対応と多職種連携」「子どもがいる家族の住まいと住み方、住環境」などを想定します。これらの事例を支援する看護職として、現状と課題について分析し、課題解決のために必要な方策(必要とされる技術、能力、システムの構築等)を具体的に考案します。これらの検証のための調査計画の立案とデータ収集、分析を行い結論を導き出すための研究指導を行います。
成育看護学	今日の少子化に伴い、子どもの出生数は減少していますが、高度医療により救命される子どもたちが増加しています。特に、小児がんの救命率は著明に高くなり、また一方では、小児疾患を抱えたまま、キャリアオーバーしていく子どもたちもいます。その子どもたちが、小児期、思春期、青年期、壮年期、老年期のライフステージの中で健やかに成長し健康維持ができるように、現状の子どものヘルスプロモーションやヘルスマンパワーについての課題を明らかにし、その方策を検討します。また、小児がん経験者、キャリアオーバーの子どもやその家族が抱える問題を明らかにし、問題解決するにはどのような支援が必要なのか研究指導をしていきます。
文化と助産・看護、国際看護	以下の研究テーマや関連する内容について、研究指導を行います。 ・グローバル社会における看護職に必要な文化対応能力と文化を考慮した助産・看護 ・国際母子保健・国際看護における課題と具体的支援方策 ・妊娠出産育児に関する文化的慣習等の歴史や現代における諸相 ・助産及び母子保健に関する政策

■ 看護学研究科 看護学専攻(修士課程) 授業科目一覧 ※授業科目等は変更になる場合があります。

科目区分	授業科目
専門科目	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 母性支援看護学特論 ◆ 小児支援看護学特論 ◆ 地域支援看護学特論 ◆ 学校保健学特論 ◆ 地域保健政策特論 ◆ 母子フィジカルアセスメント ◆ 発達支援心理学 ◆ 遺伝疾患対処論 ◆ 母子感染防止論
専門演習科目	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 母性支援看護学演習 ◆ 小児支援看護学演習 ◆ 地域支援看護学演習
科目区分	授業科目
専門演習科目	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 学校保健学演習 ◆ 地域保健政策論演習 ◆ 母子・地域看護支援演習
研究基礎科目	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 看護研究論 ◆ 保健統計学特論
研究科目	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 看護学特別研究

■ 教員一覧

教授	准教授	講師
松木 悠紀雄	高橋 郁子	島津 直実
高柳 正樹	佐山 理絵	
村田 照夫	中村 こずえ	
湯舟 邦子	坂田 清美	
河端 恵美子	猪股 久美	
工藤 恵子		
善福 正夫		
下山 京子		



教員紹介

松木 悠紀雄 Matsuki Yukio		研究科長/教授
研究分野	衛生公衆衛生学、医療看護情報学	
研究項目	保健医療福祉関係統計分析、保健医療行政、保健医療情報	
最終学歴	東京大学大学院 医学系研究科保健学専門課程 博士課程単位取得退学	
学 位	保健学博士	資 格 保健師、衛生検査技師
主な業績	【著書】「NEXT 公衆衛生学 社会・環境と健康(第3版)」講談社サイエンティフィック 共著 2011、「疫学概論ー理論と方法ー」朝倉書店 共著 2000、「Health Promotion & Education “Bringing Health to Life”」HOKEN-DOJINSHA 共著 1996、「看護・医療技術者のための情報処理入門」日本理工出版会 単著 1995、「生体時系列データ解析の新展開」北海道大学図書刊行会 共著 2000、「エコトキシコロジー」篠原出版 共著 1983、「疫学的原因論」三一書房 共訳 1982など【論文】「青年期における基礎体温の周期的変動について」人間総合科学 単著 2011、「事業所職員の体重の長期計測に関する分析」北里看護学誌 単著 2008、「“看護の喜び”を保障するシステムへー看護労働を改善するために国がなすべきことー」看護実践の科学 単著 2008、「女子学生の育児と就労に関する意識調査」母性衛生 共著 1994、「看護職の就業生命表の分析」厚生指標 1992など【メッセージ】統計や情報の分析により社会システムや制度について論じることができます。少子化社会に必要な看護支援の情報の側面から検討できるよう、研究指導をしたいと考えます。	

高柳 正樹 Takayanagi Masaki		教授
研究分野	小児科、臨床遺伝、遺伝学、臨床生化学、栄養学	
研究項目	先天性代謝異常症の治療 遺伝性疾患の診断、治療、新生児マスキリーニング	
最終学歴	金沢大学 医学部	
学 位	医学博士	
資 格	医師、小児科専門医、臨床遺伝専門医、臨床遺伝指導医	
主な業績	1. 先天代謝異常症におけるトランジションの現状と問題点。外来小児科 18:304-308,2015 単著 2. 最近、問題となっているミネラル・ビタミンなどの過剰・欠乏 特殊ミルク・経腸栄養で注意すべきカルニチン欠乏。小児内科 44: 1386-1389,2012 単著 3. 先天代謝異常症におけるタンデムマスと遺伝学検査の併用。遺伝子医学MOOK 28:149-155,2015 単著 4. Long-term outcome and intervention of urea cycle disorders in Japan. J Inher Metab Dis 35:777-85 ,2012 共著【メッセージ】遺伝性疾患を持って生まれた子供たちを、医療、福祉などの資源を利用して如何にすればそのQOLを高められるかを研究していただきたい。特に地域医療の視点をもって研究することが肝要であると思われる。またチーム医療のかなめとなるべき研鑽をつんでいただきたい。	

下山 京子 Shimoyama Kyouko		教授
研究分野	臨床看護学・小児看護学	
研究項目	小児がん患児・経験者・家族に対する研究 キャリアオーバーした患者・家族に対する研究	
最終学歴	群馬大学大学院 医学系研究科 博士前期課程修了	
学 位	修士(保健学)	
資 格	看護師	
主な業績	●小児がん患児の家族支援に関する研究の動向と課題,群馬大学保健学紀要第4巻,2008.03. ●我が国の小児がん患児への支援に関する文献的考察～近年10年間の文献考察から～小児保健研究70(1),2011.01. ●入院中の子どもの遊びに関する病棟保育士の認識,日本小児看護学会誌 22(3),2013.11.9 ●幼児期に小児固形悪性腫瘍で手術を行った小児がん経験者への疾患告知に対する母親の長期的な関わり,日本小児がん看護9(1),2014.09. ●乳幼児期に手術をした小児がん経験者の母親が晩期合併症の出現と向き合うプロセス,日本小児がん看護13(1),2018.09.【メッセージ】少子化の中で、小児がんのお子様や小児がん経験者の方または先天性疾患を持ちながら成長する方々がライフステージで健やかに成長されるためには医療者はどのような支援を行うべきなのかについて研究をしています。また、そのお子様を支える親御さんに関する研究も行っています。大学院で得た知見を臨床の場で活用・実践できるよう支援します。	

佐山 理絵 Sayama Rie		准教授
研究分野	母性看護学、助産学、国際看護学	
研究項目	文化と助産、国際母子保健、助産政策	
最終学歴	東邦大学大学院 看護学研究科 博士課程修了	
学 位	博士(看護学)	
資 格	助産師、看護師	
主な業績	●Challenges to Women's Reproductive Health and Rights in Asia, 共著 ●ラオスの産後慣習に関する看護の探査的研究(第1報)ー産後慣習の文化的理解ー, 母性衛生, 2016.04, 単著 ●ラオスの産後慣習に関する看護の探査的研究(第2報)ー看護師の文化的コンピテンシーと看護ー, 母性衛生, 2016.04, 単著 ●タイ王国パヤオ県のHealth Promotion Hospitalに勤務する看護師の職務満足に関する要因, 国際保健医療, 2016.01, 共著【メッセージ】妊娠出産育児は、人類の歴史におけるその普遍性から文化的な事象が大きく影響します。国際母子保健も踏まえ、文化を考慮した支援についてマイクロ・マクロ双方の視点から考えていきたいと思います。	

村田 照夫 Murata Teruo		教授
研究分野	産科婦人科学、主に産科臨床	
研究項目	胎児内分泌、胎盤機能検査、過期妊娠の管理、胎児管理等に関する研究	
最終学歴	横浜市立大学 医学部 医学科	
学 位	博士(医学)	
資 格	医師、産婦人科専門医	
主な業績	1. 母体血を用いた胎児胎盤機能検査の有用性 日本新生児学会誌 33(4):803-818 単著 1997.12 2. 子宮頸管炎 産婦人科の実際 50(3):285-291 共著 2001.03 3. 院内感染予防ー外来診療感染予防ー 産婦人科の実際 51(12):2081-2089 共著 2002.11 4. トキソプラズマIgM抗体陽性妊婦の管理について 日本周産期・新生児医学会雑誌 40(3):523-528 共著 2004.08 5. 迅速診断法を用いた性器ヘルペス合併妊娠の管理 日本産科婦人科学会雑誌 60(2):548 共著 2008.04【メッセージ】妊婦指導の在り方などについて一緒に考えていきたいと思っています。	

工藤 恵子 Kudo Keiko		教授
研究分野	公衆衛生看護	
研究項目	在宅生活のニーズアセスメント、多職種連携に関する研究	
最終学歴	女子栄養大学大学院 栄養学研究科保健学専攻 博士後期課程修了	
学 位	博士(保健学)	
資 格	保健師、看護師	
主な業績	公衆衛生看護活動論 技術演習 第3版 クオリティケア 共著 地域ケア会議を想定した多職種による仮想事例検討会での住まいの見取り図活用効果、日本公衆衛生雑誌、第64巻9号 P556-566 共著 保健師の活動指針と大学教育、保健師・看護師の結核展望、第52巻1号、P33-37 共著【メッセージ】少子化看護に関する課題を、個人、家族、地域を対象に広くとらえ、様々な視点から検討することで一緒に学んでいきたいと思います。	